

アウクスブルク信仰告白とグスタフ・アドルフ —— 三十年戦争期におけるプロテスタントの挿絵入りビラ ——

高津 秀之

はじめに

1517年の宗教改革の開始以来、プロテスタントとカトリックの両陣営は、挿絵入りのビラやパンフレットを主要な武器とするプロパガンダ合戦を繰り広げてきた¹。中でも1630年とそれに続く数年間は、この戦いのハイライトと言うべき時期の一つであり、特にプロテスタント陣営から多くの印刷物が出版された。1630年が二つの点で彼らにとって特別な年となったからである。

第一に、この年は、アウクスブルク信仰告白がフィリップ・メランヒトンによって起草され、同年のアウクスブルク帝国議会で提示されてからちょうど100年後の年に当たる²。1521年5月25日に神聖ローマ皇帝カール5世によって署名されたヴォルムス勅令は、宗教改革者マルティン・ルターを異端者として帝国追放刑に処するとともに、ルターや彼の信奉者たちの書物の焼却を命じていた。1526年の第1回シュパイエル帝国議会では、当時の帝国の政治状況のために、この勅令の実施は延期されたが、1529年の第2回シュパイエル帝国議会で再びその実施が決定されると、ザクセン選帝侯を始めとするルター派諸侯や都市がこれに抗議した。翌1530年、帝国の宗教問題の解決を目指して再度ドイツを訪れた皇帝は、プロテスタントに対し、彼らの神学的立場の説明を求めた。こうしてルター派の信仰箇条を詳説した信仰告白がフィリップ・メランヒトンによってまとめられ、1530年6月25日、アウクスブルク帝国議会において、皇帝に提出された。

結局皇帝はヴォルムス勅令の再施行を決定したため、アウクスブルク信仰告白制定の目的は達成されなかった。しかしその後この文書は、ルター派の信仰的・教理的基盤としての地位を獲得した。そして1630年、アウクスブルク信仰告白を記念するイベントが、ルター派の一全てではないが一領邦・帝国都市で開催された³。中でもザクセン選帝侯領では、100年前の帝国議会で

¹ 宗教改革と宗派紛争の時代のプロパガンダについては、ロバート・スクリブナーの研究の後、多くの研究が蓄積されてきた。特に日本では森田安一の先駆的な研究と蝶野立彦の研究が重要である。Scribner, Robert W.: *For the Sake of Simple Folk: Popular Propaganda for the German Reformation* Oxford 2004; 蝶野立彦『16世紀ドイツにおける宗教紛争と言論統制—神学者たちの言論活動と皇帝・諸侯・都市—』彩流社2014年; 森田安一『ルターの首引き猫—木版画で読む宗教改革—』山川出版社1993年。

² アウクスブルク信仰告白の起草から帝国議会での提出に至る過程や信仰告白の内容については、主に以下の文献を参照した。森田安一『図説 宗教改革』河出書房新社2010年21–27頁; 『宗教改革著作集 第14巻』教文館1994年624–626頁; ロベルト・シュトゥッペリヒ (森田安一訳)『ドイツ宗教改革史研究』ヨルダン社1984年123–132頁。

³ Hänisch, Ulrike Dorothea: 'Confessio Augustana triumphans': Funktionen der Publizistik zum Confessio

信仰告白が提出された日である6月25日をはさむ6月24日から26日までの3日間、選帝侯領内の各地の教会で信仰告白に関する説教が行われた。また、ヴィッテンベルクなどの都市の大学で講演会や討論会が開催され、初等・中等学校では子供たちによる演劇が上演された⁴。さらにこの年から数年間、アウクスブルク信仰告白を主題とする多くのビラやパンフレットが、ドイツのみならずヨーロッパの諸都市で印刷・出版された。

第二に、1630年は、ドイツのみならずヨーロッパ全体を戦乱の渦に巻き込んだ三十年戦争の歴史において、スウェーデン国王グスタフ・アドルフが、ドイツのプロテスタントの保護を名目として、戦争への本格的な介入に踏み切った年である⁵。「北方の獅子」と呼ばれた国王に率いられたスウェーデン軍は、1630年6月4日にドイツ北部のウーゼドームに上陸、その後1632年11月16日のリュッツェンの戦いで国王が戦死を遂げるまで、ドイツ各地で赫々たる戦果を挙げていく。これを受けて、この時期スウェーデン王を登場人物とする多くのビラやパンフレットが印刷、出版された。さらに「アウクスブルクの信仰告白」と「グスタフ・アドルフ」という二つのテーマが、一枚の版画の中で相互に関連付けられることもあった。

筆者は以前、「宗教改革100周年」の年である1617年に出版された印刷物の挿絵を取り上げ、そこに描かれた「ルター」や「ローマ教皇」などのイメージを検討し、宗教改革という事件に対する人びとの歴史認識や記憶のあり方について考察した⁶。本論文では、これと同様の試みを、「アウクスブルク信仰告白100周年」の年とその後数年間に出版されたビラの挿絵を対象として行いたい⁷。特にそこにおけるアウクスブルク信仰告白とスウェーデン王のイメージ、両者に割り振られた役割—あるいは役柄—に注目する。以下、アウクスブルク信仰告白とグスタフ・アドルフの両方、あるいはそのいずれかをテーマとするビラを紹介し、挿絵の内容を検討する。

1. 「福音の光」としてのアウクスブルク信仰告白とグスタフ・アドルフ

「マタイによる福音書」第5章第14－16節に由来する「福音の光」は、ハンス・ホルバイン

Augustana- Jubiläum 1630, Frankfurt a. M. 1993, S. 82.

⁴ Hänisch: *Confessio*, S. 84 – 113.

⁵ 三十年戦争におけるグスタフ・アドルフとスウェーデン軍については、以下の文献を参照した。C. ヴェロニカ・ウェッジウッド（瀬原義生訳）『ドイツ三十年戦争』刀水書房2003年287－360頁。

⁶ 高津秀之「1617年のドイツ 宗教改革から100年」踊共二（編）『記憶と忘却のドイツ宗教改革 語りなおす歴史 1517－2017』ミネルヴァ書房2017年167－188頁；高津秀之「宗教改革百周年記念ビラにおけるルターの復活 宗教改革の図像学的トポスの継承と変容」甚野尚志・益田朋幸（編）『ヨーロッパ文化の再生と革新』知泉書館2016年197－216頁。

⁷ このテーマについては、以下の二つの文献で論じられている。Hänisch: *Confessio*; Marsch, Angelika: *Bilder zur Augsburger Konfession und ihren Jubiläen*, Weißenhorn 1980.

による木版画ビラの挿絵以降、繰り返し描かれてきた⁸。そして1630年頃にアムステルダムで出版されたビラ『アウクスブルク信仰告白』(図1)では、アウクスブルク信仰告白が「福音の光」として表現されている⁹。ルターとザクセン選帝侯の間にある巨大な燭台は、聖書のうえに据えられ、7本の蠟燭が灯っているが、各蠟燭を支える枝には各々3枚、合計21枚のメダルが飾られている。これらは、全21項の信仰告白の内容をそれぞれ図解したものである。

1630年に出版されたビラ『神聖ローマ帝国の高権』(図2)の挿絵でも、「福音の光」とアウクスブルク信仰告白が結び付けられている¹⁰。すなわち、4人の福音書作者マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネを象徴する、人・獅子・牡牛・鷲の像を隅に置く祭壇—もっともマタイ=人の像は隠れて見えない—には聖書が置かれ、ルターが聖書のうへの「福音の光」の灯を支えている。そしてその横では選帝侯位を象徴する白貂の毛皮を身にまとったザクセン選帝侯が、アウクスブルク信仰告白を捧げ持っている。彼の頭上には鷲が飛んでいるが、この鷲は冠を頭に載せ、左手に地球儀を持ち、胸に金羊毛騎士団の首飾りをつけていることから、神聖ローマ皇帝の象徴である。したがってここでは、ザクセン選帝侯が皇帝に信仰告白を提出した1530年のアウクスブルクの帝国議会場の場面が再現されていることになる。

さらに鷲=皇帝の背後には風の精霊がおり、口から雨(あるいは雹)や風を吹き出している。彼は「福音の光」を吹き消そうとしているが、この試みは失敗している。両者の間にいる鷲が「福音の光」を守っているからである。したがってこのビラの作者は、「福音の光」=アウクスブルク信仰告白を守護するのは、鷲=皇帝その人であると主張している。当時の皇帝フェルディナント2世は幼いころからイエズス会の教育を受けた強硬派のカトリックであり、1629年3月6日に「教会領回復令」を公布し、1555年のアウクスブルクの宗教和議以降にプロテスタント諸侯によって没収されたカトリック教会の財産の返還を命じた¹¹。これは宗教和議以降の帝国のルター派とカトリックの二宗派併存体制を根本的に否定するものであり、実際には皇帝こそがプロテスタントの「光」を吹き消そうとする張本人であった。しかし、このビラでは、皇帝は一ときの皇帝の信仰・政治的意図とは無関係に一帝国の秩序の担い手・守護者として描かれている¹²。

⁸ Scribner, *Propaganda*, p. 46; 森田『木版画を読む』213頁; 高津「ルターの復活」199頁。

⁹ 『アウクスブルク信仰告白』は、以下の資料集に解説とともに収められている: Harms, Wolfgang/ Schilling, Michael (Hg.): *Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. und 17. Jahrhunderts*, Bd. 2, Tübingen 1980, S. 370 – 371. また、このビラの出版年は不明であるが、1630年以降ほどなくして出版されたようだ。これについては以下の文献を参照: Hänisch: *Confessio*, S. 171.

¹⁰ 『神聖ローマ帝国の高権』は、以下の資料集に解説とともに収められている: Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 374 – 375.

¹¹ ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』255 – 258頁。

¹² 同様の皇帝のイメージとして、1630年に出版されたビラ『記念年の喜び: 賛美と感謝の祭』がある。ここでは聖書から育った木として描かれる「アウクスブルク信仰告白」を皇帝=鷲と獅子=スウェーデン王が敵から守っている。このビラは、以下の資料集に解説とともに収められている: Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 376 – 377.

全体的な傾向として、本論文の対象時期におけるプロテスタントの反カトリック・プロパガンダは、皇帝を攻撃の対象としていない。「教会領回復令」をなどの皇帝の反プロテスタント政策は、彼自身ではなく、イエズス会を中心とする側近たちに由来するものと見なされていた¹³。あるいは「皇帝は帝国の従来制度を尊重し、守るべきだ」というメッセージが、ここでの鷲＝皇帝のイメージに込められているのかもしれない。

『アウクスブルク信仰告白』と『神聖ローマ帝国の高権』の挿絵に、プロテスタントの宿敵であるローマ教皇やカトリック聖職者たちは登場していない。彼らに対する批判的な態度や敵意は抑制されており、穏健的な内容といえよう。これに対して、1632年に出版されたビラ『教会の要石と永遠の光』（図3:以下『永遠の光』）には、カトリックの聖職者たちが登場する¹⁴。彼らはふいご、引っ掛け棒、扇風機のような器具を用いて、4人の福音書作者を象徴する人・牡牛・獅子・鷲に四隅を囲まれた祭壇—この祭壇の正面に記された“VDMIA”の意味については後述する—にある聖書のうえに置かれた「福音の光」を消そうとしている。しかし一人の騎士が、柱を抱えた女性—「剛毅」を象徴する擬人像—から剣を受け取り、「福音の光」を守ろうとしている。この騎士は、ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルクである。雲の間からは一振りの剣を握る神の右手が現れ、雷を伴う嵐の中、軍隊が戦闘を繰り広げている。そしてここには、スウェーデン王グスタフ・アドルフもいる。もともと、彼は人間ではなく、獅子の姿で描かれている。羊飼いの姿をしたイエス・キリストが、彼を戦場へと送り出したところだ。ここでスウェーデン王はまだ主役ではなく、助っ人、脇役のようである。

同じ年に出版された『神の恩寵ある信仰告白：あらゆる損害から再び栄える』（図4:以下『信仰告白』）でも、カトリックの司教や修道士たちが、「教会の墮落」・「迷信」・「誤謬」・「傲慢」を武器に、「福音の光」としてのアウクスブルク信仰告白—燭台の胴体に“Augsburg Confession”と記されている—を消そうとしている¹⁵。彼らと対峙する騎士は、先のヨハン・ゲオルクの像と似ているが、グスタフ・アドルフである。彼は神から授かった剣を高く掲げているが、この剣は先のビラにある神の手に握られた剣を想起させる。単なる偶然ではあろうが、『信仰告白』と『永遠の光』は続き物の作品のようである。すなわち、『永遠の光』で雲間から手を突き出す神が差し出した剣を、『信仰告白』のグスタフ・アドルフが受け取ったかのようなのである。一方、「剛毅」の女性像から剣を託されたはずのザクセン選帝侯は、舞台から消えている。まるで彼のアウクスブルク信仰告白の守護者という役割を、スウェーデン王が奪ってしまったかのようなのである。

¹³ Hänisch: *Confessio*, S. 171; ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』62頁。

¹⁴ 『教会の要石と永遠の光』は、以下の資料集に解説とともに収められている :Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 474 – 475.

¹⁵ 『神の恩寵ある信仰告白：あらゆる損害から再び栄える』は、以下の資料集に解説とともに収められている :Harms, Wolfgang (Hg.): *Illustrierte Flugblätter aus der Reformation und der Glaubenskämpfe*, Coburg 1983, S. 176 – 177.

2. アウクスブルク信仰告白の騎士グスタフ・アドルフ

アウクスブルク信仰告白の一新しい―守護者としてのスウェーデン王の姿をよりロマンチックに示した絵が、1632年のビラ『人物像の紹介：いかに正しく、良く神の言葉に基づいたアウクスブルク信仰告白がスウェーデン王によって解放されたか』（図5：以下『人物像の紹介』）に掲載されている¹⁶。画中には8人の女性と一人の男性がいる。甲冑を身にまとい、頭に王冠を載せた男性はスウェーデン王グスタフ・アドルフであり、8人の女性の足もとには彼女たちの素性が記されている。このうち左から3番目の女性を除く7人は、左から順番に、平和、真実、信仰、忍耐、慎重、剛毅、勝利の擬人像である。残る一人の女性は、手に聖書とペンを持ち、両側の女性から頭に王冠を載せられている。彼女は「信仰告白」(Confession)、すなわちアウクスブルク信仰告白の擬人像である。画面右上には神がおり、彼女に恩寵の光を投げかけている。信仰告白の擬人像とグスタフ・アドルフは視線を合わせ、両者の親密な関係をうかがわせる。まるで騎士道文学における、宮廷風恋愛の場面のようだ。信仰告白の擬人像は7人の侍女を従えた貴婦人、スウェーデン王は彼女に愛と奉仕を捧げる騎士という役回りである。

彼らの背景には「キリストの教会」と記された建物、さらにその後ろには都市が描かれているが、この都市は、“16 Augsburg 32”と記された帯からも分かるように、1632年のアウクスブルクである。1530年以降、ルターの信仰告白の町として神聖視されるようになっていたアウクスブルクは、1555年のアウクスブルクの宗教和議以降、カトリックとプロテスタントの二宗派併存体制が確立していた。しかし、1629年8月8日、上述の「教会領回復令」に基づき、この都市でのルター派の信仰は全面的に禁止され、牧師たちは市外に追放された。これを受けて、8000人のルター派市民が都市を離れることとなる¹⁷。しかし、やがてドイツ侵攻を開始したスウェーデン軍が、1632年4月20日にこの都市を無血占領すると、プロテスタントはかつての彼らの教会を取り戻した¹⁸。この事件は多くの印刷物によって大々的に報じられた。『人物像の紹介』は、その中の一枚である。こうしてグスタフ・アドルフは、ルター派の「聖地」と一ビラのタイトルにあるようにアウクスブルク信仰告白を、カトリック支配から「解放」した「英雄」として、プロテスタントの人びとの記憶に刻まれることになる¹⁹。

¹⁶ 『人物像の紹介：いかに正しく、良く神の言葉に基づいたアウクスブルク信仰告白がスウェーデン王によって解放されたか』の挿絵は、以下の文献に掲載されている。Marsch: *Bilder*, Nr. 57.

¹⁷ ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』261－262頁。

¹⁸ Roeck, Bernd: *Geschichte Augsburgs*, München 2005, S. 136.

¹⁹ ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』342頁。

3. 黙示録的戦いとしての三十年戦争とグスタフ・アドルフ

同様に、1632年に出版された2枚の連作ビラの挿絵は、合せてスウェーデン王によるアウクスブルク解放の物語を伝えている。すなわち、最初のビラ『苦境にある都市アウクスブルク』(図6)の挿絵では、アウクスブルクを挟んで2頭の獣が対峙している²⁰。左側の獣は「ヨハネの黙示録」第13章第1-10節に登場する「10の角と7つの頭をもっていて、角には10の冠、頭には冒瀆の名」がある竜である²¹。右側の獣は同じく第13章第11-18節に登場する「小羊のような2本の角」を生やした獣である。こちらは竜に仕え、666の数字を持つ。獣たちの口から吐き出されたイエズス会士などの修道士や神学者は、次々に都市に向って降下していく。アウクスブルクのプロテスタントに危機が迫っているのだ。しかし、もう一枚のビラ『神の恩寵によって救われた都市』(図7)では、この2頭の獣をスウェーデン王が退治し、アウクスブルクを救出している²²。画面右側では、「教会領回復令」後のカトリック化政策を逃れて都市を離れていたプロテスタントの市民が帰還し、左側では、カトリックの聖職者たちが都市から逃げ出している。

このビラでは、アウクスブルクをめぐるカトリックとプロテスタントの攻防は黙示録に預言された終末論的な事件として解釈され、グスタフ・アドルフはそこにおける英雄・救世主としての役割を与えられた。宗教改革100周年の年である1617年に出版されたビラの挿絵では、ルターは黙示録の天使、ローマ教皇は反キリスト＝黙示録の獣として描かれた²³。1617年に、こうしたイメージが三十年戦争直前の不安感や緊張感の中で形作られたのであれば、すでに現実となった三十年戦争の最中の1632年に、戦争が黙示録の戦いとして描かれたとしても何の不思議もない。しかし、ここで興味深いのは、本論文の対象時期に出版されたビラの挿絵における黙示録的な戦いのイメージに、グスタフ・アドルフが頻繁に登場することである。

同様に、1630年の『アウクスブルク信仰告白の勝利：最初の記念年』(図8)の挿絵の画面中央には島と教会が描かれ、これを5名の人物が守っている²⁴。画面左側にはルターとメランヒトンがおり、ルターが付き出す槍の先には玉座に座ったローマ教皇がいる。カトリックとプロテスタントのプロパガンダ合戦ではお馴染みのシーンであるが、ここでもルターとローマ教皇が一騎

²⁰ 『苦境にある都市アウクスブルク』は、以下の資料集に解説とともに収められている：Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 462 – 463.

²¹ フェデリコ・バルバロ訳『聖書』講談社396頁。

²² 『神の恩寵によって救われた都市』は、以下の資料集に解説とともに収められている：Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 464 – 465.

²³ 詳しくは、以下の拙稿を参照いただきたい：高津「宗教改革百周年記念ビラにおけるルターの復活」。

²⁴ 『アウクスブルク信仰告白の勝利：最初の記念年』は、以下の資料集に解説とともに収められている：Harms, Wolfgang / Kemp, Cornelia (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 4, S. 216 – 217.

打ちを繰り広げる²⁵。画面右側の選帝侯の身分を示す白貂のマントをまとった人物は、ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルクである。さらにその隣の馬に乗った人物は、頭に王冠を載せ、口から剣を出している。彼は「ヨハネの黙示録」第19章第11-16節に登場する「口から剣を出す人の子のような者」であり、この戦いが黙示録の戦いであることを示唆している。また、画面右下に描かれた竜も黙示録の怪物、すなわち第12章に登場する「口から水を吐く竜」である。

教会の上空には3人の天使が飛んでいるが、うち二人は黙示録第8章から第11章に登場する7人の天使のように喇叭を吹き鳴らしている。この3人の天使はそれぞれ手にする書物を持っているが、書物の開かれた頁には、左から順に「アウクスブルク信仰告白」、「永遠の福音」、「福音の「眼球」(“AugApfel”)」と記されている。このうち「眼球」の意味については解説が必要であろう。ここでの「眼球」(ドイツ語ではAugapfel)は「アウク(Aug)スブルクの信仰告白」に重ね合わされているが、この言葉遊びは、1629年に出版されたパンフレット『神聖ローマ帝国の福音派の選帝侯と諸侯の「眼球」(“AugApfel”)のために必要な防衛』(以下『眼球的防衛』)に由来する。このパンフレットは、ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルクに仕えたドレスデンの宮廷説教師であるマティアス・ヘーエ・フォン・ホーエンエッグの主導のもとで、信仰告白の正統性を主張するルター派神学者たちによって執筆・出版された。その後彼らとイエズス会士をはじめとするカトリック神学者たちとの間に「眼球論争」と呼ばれる論争が勃発する。こうして『眼球的防衛』は、この論争のきっかけとなったいわゆる文書として、「眼球」はアウクスブルク信仰告白の隠語として、広く認知されることになった²⁶。

天使たちの掲げる3冊の書物は、アウクスブルク信仰告白が、正統なキリスト教の教義にのっとった、守るべき信条であることを示している。これに対し、画面左側には崩壊する都市と6匹の蝙蝠が描かれている。都市はローマであり、蝙蝠は足に「教令」、「教会法」、「徹夜課」、「贖宥」、「死者ミサ」など、カトリック教会の規範やその具体的な内容を記した書状をぶら下げている。

そしてグスタフ・アドルフは、「口から剣を出す人の子のような者」の隣に、甲冑を身にまとった騎士の姿で描かれている。現実の三十年戦争の舞台にさっそうと登場したスウェーデン王は、イメージの世界の黙示録的な戦いにおいても、ルターとメランヒトン、そしてザクセン選帝侯と並ぶ主役の地位を与えられたことになる。

4. グスタフ・アドルフとヨハン・ゲオルク

この3人のうち、メランヒトンを除く二人は、1632年のピラ『神の言葉とアウグスブルク信仰告白の真理、言葉、武器と血のために戦う不屈の英雄三人組』(図9: 以下『英雄三人組』)で

²⁵ 森田『ルターの首引き猫』140-178頁; 高津「宗教改革百周年記念ピラにおけるルターの復活」198-202頁。

²⁶ このいわゆる「眼球論争」については、以下の文献を参照: Hänisch: *Confessio*, S. 38-49; Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 438.

も、グスタフ・アドルフとの共演を果たしている²⁷。すなわち、ルターを真中にして、スウェーデン王とザクセン選帝侯が剣と剣を交差させて、大きな書物を支えている。この書物には、ラテン語で「神の言葉は永遠に留まる イザヤ書第40章」、ドイツ語で「神の言葉とルターの教えは決して滅びない」と記されている。この二つの言葉のうち、新約聖書の「ペテロの第一の手紙」第1章第24-25節にも引用されている前者は、この時期のプロテスタントにお馴染みの標語であった²⁸。先に紹介したビラ『永遠の光』の祭壇正面に記された“VDMIA”は、この言葉（*verbum dei manet in aeternum*）を省略して表記したものである。また、二人は剣を持たない方の手で「聖書」と「アウクスブルク信仰告白」と頁に記された同じ書物を一それぞれルターとともに一広げている。

ここで強調されているのは、ともにルター主義を信仰する二人の君主の間に結ばれた同盟関係の強固さと宗派政治的な正統性であろう。しかし現実には、両者の関係は不安定なものであった。ヨハン・ゲオルクは、1555年のアウクスブルク宗教和議によって公認されたルター派とカトリックの二宗派体制の維持、すなわちカルヴァン派や再洗礼派などのそれ以外の宗派の排除を志向するなど、神聖ローマ帝国の現状維持を目論む保守派であった。そんな彼にとって、グスタフ・アドルフは、プロテスタントの救援を名目に神聖ローマ帝国に勢力を拡大しようとする、よそ者の侵略者に他ならなかった²⁹。したがって当初、ヨハン・ゲオルクは「教会領回復令」の撤回を条件として、皇帝フェルディナント2世に、侵略者グスタフ・アドルフと戦うための軍事的支援を与えようとした。このために彼は、ブランデンブルク選帝侯ゲオルク・ヴィルヘルムをはじめとするプロテスタント諸侯・都市とともにライプツィヒで会合を開き、1631年3月28日に皇帝に対してライプツィヒ宣言を発して、「教会領回復令」の撤回を求めた。しかし、皇帝はこの要求を拒否する。さらにティリー伯ヨハン・セルクラエスが率いる皇帝軍が5月20日にプロテスタントの都市マグデブルクを陥落させ、9月4日にはついにザクセン選帝侯領に侵攻した。ここでようやくザクセン選帝侯はスウェーデン王との同盟に踏み切り、9月11日に両者の同盟が締結された。そして9月18日にブライテンフェルトの戦いで、ザクセンとスウェーデンの軍隊は共に皇帝軍と戦い、勝利を収めることになる³⁰。

しかし、この勝利の名誉はもっぱらグスタフ・アドルフとスウェーデン軍に与えられるべきものであった。ザクセン選帝侯と彼の軍隊は、皇帝軍の攻撃を受けて、不名誉にも戦場から逃亡し

²⁷ 『神の言葉とアウクスブルク信仰告白の真理、言葉、武器と血のために戦う不屈の英雄三人組』は、以下の資料集に解説とともに収められている：Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 472 – 473.

²⁸ Hänisch: *Confessio*, S. 62 – 63.

²⁹ ヨハン・ゲオルクのプファルト選帝侯フリードリヒとスウェーデン王に対する見方・評価については、以下の文献を参照。ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』113, 123, 300 – 301 頁。

³⁰ ライプツィヒ宣言からブライテンフェルトの戦いに至る時期におけるザクセン選帝侯とスウェーデン王の関係については、以下の文献を参照。ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』299 – 327 頁。

ていたからである³¹。ドイツのプロテスタントの解放者として人びとの賞讃を集めるスウェーデン王は、ザクセン選帝侯のかつての政治的ライヴァル、すなわちプロテスタント「同盟」の盟主であり、数か月とはいえポヘミア国王の座にも就いたプファルツ選帝侯フリードリヒに対するのと同様、あるいはそれ以上に、ザクセン選帝侯の嫉妬心をかき立てたであろう。ルターの主君にして庇護者であったザクセン選帝侯の地位を引き継ぐヨハン・ゲオルクには、帝国のプロテスタントの盟主としての自負があった。

このように、グスタフ・アドルフとヨハン・ゲオルクの関係は、同盟締結前も締結後も緊張はらんだものであった。しかし、『英雄三人組』の挿絵から、スウェーデン王の侵略者としての野心や、ザクセン選帝侯の不名誉な行動、そして前者に対する後者の嫉妬心などの徴候を読み取することは難しい。

1632年11月16日のリュッツェンの戦いでスウェーデン王は死去し、1634年9月6日のネルトリンゲンの戦いでスウェーデン軍は皇帝軍に敗北を喫した³²。そして1635年5月30日、ザクセン選帝侯は皇帝と「プラハの平和」を締結する。こうしてザクセン選帝侯はスウェーデンと手を切り、ついに「教会領回復令」の放棄に踏み切った皇帝の同盟者となった³³。このザクセン選帝侯の政治的立場の変化を受けて、1636年に恐らくはユトレヒトで、ビラ『幻の幽霊：すなわちスウェーデン王の亡霊がザクセン選帝侯に話しかけた』（図10：以下『幻の幽霊』）が出版された。そこには、グスタフ・アドルフがヨハン・ゲオルクの夢に現れ、プラハの和約の締結を非難する様子が描かれている³⁴。すなわち彼は、右手に松明を持ち、左手は自らの心臓を指さしている。また、彼の足もとにはハーフェルスベルクの地図が広げられている。ランデンプルク選帝侯の領地であったこの地で、1635年12月7日から11日にかけてスウェーデン軍とザクセン軍の戦闘が行われ、スウェーデン軍が勝利していた³⁵。

眠っている選帝侯の側で紙片を持つ人物は、「プラハ平和」の締結のための交渉を主導したダーヴィット・デューリング博士である。「赦し、そして常に赦し」と書かれた紙片は、彼の妥協的な態度を批判しているのであろう。また、窓の側に座っている人物は、すでに紹介したドレスデンの宮廷説教師マティアス・ヘーエである。ザクセン選帝侯の夢を題材としたビラと言え、1617年に出版され大きな反響を呼んだ『神的な文書に関する、考察に値する夢』がある³⁶。ビラ『夢

³¹ ブライテンフェルトの戦い後のザクセン選帝侯とスウェーデン王に対する評判については、以下の文献を参照。ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』327－331頁。

³² リュッツェンの戦いとネルトリンゲンの戦いについては、以下の文献を参照。ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』348－355, 400－408頁。

³³ ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』419－421頁。

³⁴ 『幻の幽霊：すなわちスウェーデン王の亡霊がザクセン選帝侯に話しかけた』は、以下の資料集に解説とともに収められている：Harms / Kemp (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 4, S. 310－311。

³⁵ Harms / Kemp (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 4, S. 310。

³⁶ 詳しくは、以下の拙稿を参照いただきたい：高津「1617年のドイツ」167－188頁。

のお告げ』の挿絵の作者は、この15年前に出版されたビラから着想を得ていたのかもしれない。

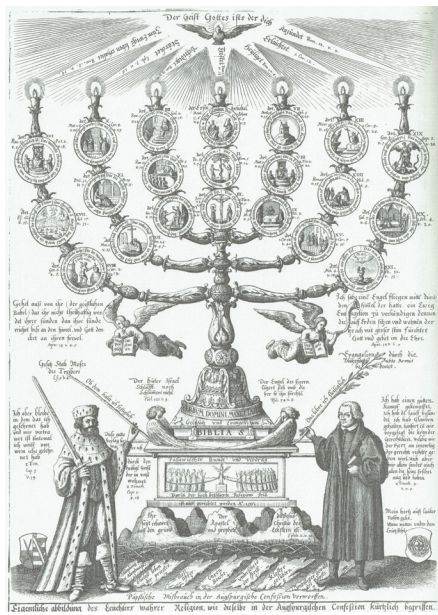
この挿絵からもうかがえるように、イメージの世界では、スウェーデン王が死後も英雄として称賛とともに描かれ続け、ザクセン選帝侯を圧倒していた。ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルクは、彼の強力な同盟者でありライヴァルであったスウェーデン王の死後も、長らく権力の座に留まった。そしてこれを可能にしたものこそ、ビラで批判されている彼の穏健的・保守的・慎重な態度であった。しかし、宗派間のプロパガンダ合戦におけるプロテスタント陣営の武器として、敵対勢力に対する反感を煽るとともに、味方の戦闘意欲を鼓舞することを目的とする印刷物で、こうした彼の態度が肯定的に描かれることはなかった。

おわりに

1630年は、三十年戦争、そしてプロテスタントとカトリックのプロパガンダ合戦の歴史において、画期的な年であった。1530年のアウクスブルク信仰告白の誕生から100年後のこの年、かつて1617年に「宗教改革100周年」を記念する印刷物が出版されたように、信仰告白を記念するビラが数多く出版された。もっとも信仰告白のみが問題となっている場合、ビラに示されたメッセージは、特にローマ教皇に対する直接的な攻撃が見られない点において、1617年の「宗教改革100周年」を記念するビラのそれとは異なり、穏健なものに留まっていたと言えよう。しかし、これがグスタフ・アドルフのドイツ侵攻という、1630年に起こったもう一つの事件と結びつくと、挿絵には、1617年のビラにあったような、ローマ教皇とカトリック聖職者との黙示録的・終末論的な戦いのイメージが登場し、より直接的かつ過激な攻撃を、敵対陣営に対して加えることとなった。そしてその戦いにおける主役の座は、スウェーデン王に与えられた。

現実の世界のグスタフ・アドルフは、ドイツ・プロテスタントを救った英雄であるとともに、彼ら信仰の同胞を救済すべきことを口実に、神聖ローマ帝国を侵略しようと目論んだよそ者でもあった。しかし、1630年から数年の間に出版されたビラの挿絵では、彼の侵略者としての側面が示されることはなく、もっぱらアウクスブルク信仰告白の守護者としての側面が強調された。そしてこの「グスタフ・アドルフ」というイメージの世界のキャラクターは、現実のスウェーデン王の死後も生命を保ちヨハン・ゲオルクをはじめとする一生ける者たちを励まし、あるいは脅かし続けたのである。

【图 1】



【图 2】



【图 3】



【图 4】



【图 5】



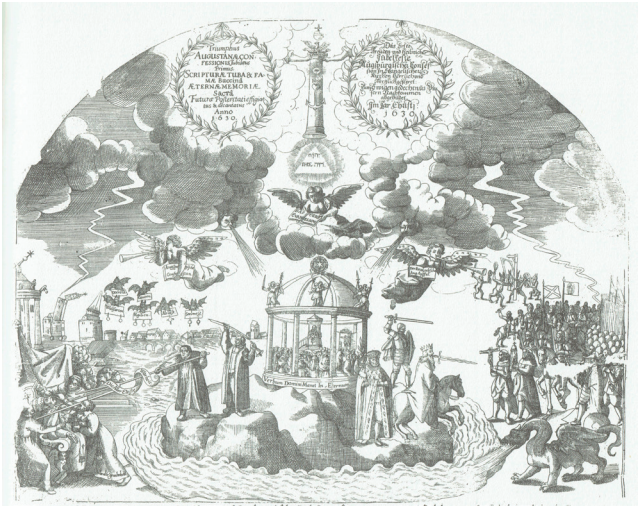
【图 6】



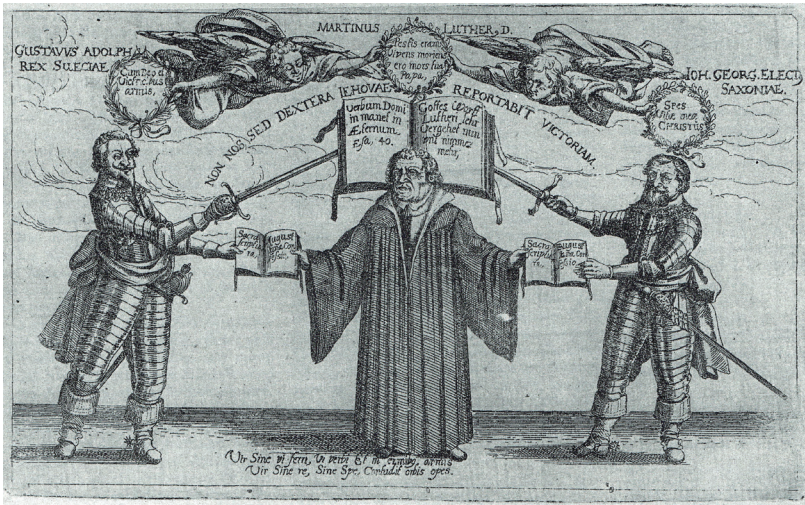
【图 7】



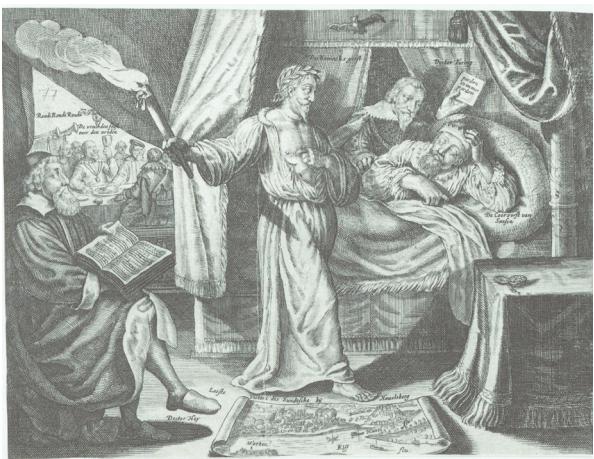
【图 8】



【图 9】



【图 10】



【図版出典一覧】

- ☒ 1 : Harms, Wolfgang/ Schilling, Michael (Hg.): Deutsche illustrierte *Flugblätter* des 16. und 17. Jahrhunderts, Bd. 2, Tübingen 1980, S. 371.
- ☒ 2 : Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 375.
- ☒ 3 : Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 475.
- ☒ 4 : Harms, Wolfgang (Hg.): Illustrierte Flugblätter aus der Reformation und der Glaubenskämpfe, Coburg 1983, S. 177
- ☒ 5 : Marsch, Angelika: *Bilder zur Augsburger Konfession und ihren Jubiläen*, Weißenhorn 1980, Nr. 57.
- ☒ 6 : Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 463.
- ☒ 7 : Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 465.
- ☒ 8 : Harms, Wolfgang / Kemp, Cornelia (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 4, S. 217.
- ☒ 9 : Harms/ Schilling (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 2, S. 473.
- ☒ 10 : Harms / Kemp (Hg.): *Flugblätter*, Bd. 4, S. 310 – 311.